様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０００２

研究課題名（和文）道徳的行為の動機付けに関する内在主義と誠実さの徳倫理との関連についての研究

研究課題名（英文）A study on the relation between the moral motivational internalism and the virtue ethics of truthfulness

研究代表者
藏田　伸雄（KURATA, NOBUO）

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：５０３０３７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,500,000円、（間接経費）　1,050,000円

研究成果の概要（和文）：本来は情動主義的・非-認知主義的な主張であった動機内在主義は、合理主義的な認知主義的方向に向かいつつある。また内在主義-外在主義の論争は、道徳判断に関する定義と理解の相違に基づいている。さらに合理主義的な動機内在主義の代表はカント倫理学であるとされることが多いが、カント倫理学は道徳判断をキーワードとする厳密な意味での動機内在主義とは異なる。しかしカントの格率概念を道徳判断と同義のものと読み替えることによって、カント倫理学を合理主義的動機内在主義として理解することが可能になる。このような合理主義的動機内在主義は徳倫理学を前提している。

研究成果の概要（英文）：Motivational Internalism was regarded as a standpoint resulted from emotivism and non-cognitivism, however recently it has developed to rational one and a kind of cognitivism.And the Internalism-Rationalism debate is a result of different difinitions and understandings of Moral Judgments. And many people believe that Kantian Ethics is a typical theory of rational motivational Internalism, but it is different from the motivational internalism in the strict sense whose keyword is moral judgment. However if the concept of Maxim in the Kantian Ethics is understood as a moral judgement in metaethics,we can regard Kantian Ethics as one of rational motivational internalism. And rational motivational internalism is based on a kind of virtue ethics.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学　哲学・倫理学

キーワード：メタ倫理学　動機内在主義　徳倫理学　カント倫理学　道徳判断　表出主義　トマス・ネーゲル

１．研究開始当初の背景

ムーアの『倫理学原理』(Principia Ethica,1903)に始まる現代メタ倫理学は、論理実証主義を経て、エイヤー、スティーブンスンの情動主義、ロス、プリチャードの直観主義、ヘアの言語分析を経て、1980 年代以降、道徳認識論、道徳存在論、道徳心理学の領域で多くの研究が進められてきた。そして道徳認識論については認知主義か非-認知主義（表出主義）か、道徳存在論については道徳的事実についての実在論か反実在論か、さらに道徳心理学については行為の動機付けについての内在主義・外在主義かといった対立軸を中心に現在でも多くの論争がなされている。論理実証主義以降は非-実在論、非-認知主義の立場に基づく表出主義的な立場が主流となっていたが、近年「コーネル・リアリスト」(非還元主義的な自然主義的道徳実在論者:R.Boyd や D.Brink)らによって、道徳実在論の再提起が行われ、また道徳認識論については J.Dancy や、R.Audi らが認知主義を主張している。その中で、マクダウェルの認知主義的徳倫理学(J.McDowell, *Mind, Value, and Reality*(2001))、ブラックバーンの準実在論的表出主義、ギバードの可能世界論や進化倫理学を用いた表出主義(Allan Gibbard *Wise Choices, Apt Feelings* (1990)) といった様々なメタ倫理学理論が提示されている。

これらの近年のメタ倫理学理論についてまとめた文献としては Alexander Miller, *An Introduction to Contemporary Metaethics*(2003)などがあり、またメタ倫理学の入門書でありながら、独自の主張も展開しているマイケル・スミスの『道徳の中心問題』(邦訳 2006、原著は 1994) では、内在主義を中心とした論点の整理が行われている。これらの文献によって現代メタ倫理学の見取り図を俯瞰することは容易になった。しかし、こういった文献ではメタ倫理学の様々な立場が概観されてはいるものの、メタ倫理学がカント的義務倫理学や徳倫理学に対して与えたインパクトについて必ずしも明確に示されているわけではない。

そこで手掛かりにしたことは、道徳心理学に関する主要な学説である動機内在主義の分析である。動機内在主義とは、道徳判断には直接的に行為を動機付ける力が内在しており、道徳判断と道徳的行為の動機付けとの間には必然的・概念的な結びつきがあるとする立場のことである。これは道徳的認識・道徳的真理がそれだけで行為の動機付けを与えるとする立場のことだとされることもある。一方外在主義とはこのような主張を認めない立場のことである。

一方フット(P.Foot)による現代徳倫理学の主張や(*Virtues and Vices*,1978)、A.マッキンタイア(A.MacIntyre)の『美徳なき時代』(*After Virtue*,1981,邦訳 1993)の出版後、徳倫理学が復権をとげたと言われている。同様に B.ウィリアムズも徳倫理学的な議論を展開し、さらに徳倫理学的な主張は、J.マクダウェル(McDowell)やハーストハウスらによっても展開されてきた(J.McDowell, *Mind, Value and Reality*,1998, R.Hursthouse, *On Virtue Ethics*,1999 等)。

しかしマッキンタイアが徳倫理学を共同体主義と結びつけて提起したために、徳倫理学は相対主義的な主張として理解されることもあったが、そのような「共同体の中で共有されてきた伝統的な徳目」を重視する徳倫理学とは異なる、非相対主義的な徳倫理学が可能なはずである。そしてメタ倫理学と徳倫理学との関連については必ずしも充分に検討されているとは言いがたい。

本研究の第一の目的は行為の動機付けに関する内在主義と外在主義との論争を軸にして、メタ倫理学の見取り図を描き、さらにその論争の規範倫理学、特に徳倫理学との関連を検討する中で、合理主義的・カント的内在主義の可能性を検討することであった。

またベンサム研究を専門とする連携研究者の児玉は本研究期間中に 18 世紀から 20 世紀に至る功利主義と直観主義との関係についての著書『功利と直観』（勁草書房）を刊行したが、本書は功利主義との関連で道徳認識論に関して見通しを与えるものであった。

２．研究の目的

現在のメタ倫理学は多くの意見の対立を含んでいるが、研究代表者はこの中に規範倫理学理論としては徳倫理学への収斂という方向性を見ることができると考えた。本研究の当初の目標は内在主義論争の検討を通じて、規範倫理学としての徳倫理学に至る道筋を明らかにすることであった。

本研究の目的は、動機内在主義と徳倫理学とが必然的な関係にあることを明らかにすることである。そのためには動機内在主義を

含むそして現代の徳倫理学及び義務倫理学とメタ倫理学との関連を明らかにするためには、既存のメタ倫理学に関する議論の整理が必要である。新たな合理主義的な徳倫理学を構想するためには、道徳存在論・道徳認識論・道徳心理学の内容を問い直す必要がある。一方徳倫理学には道徳心理学を重視するバージョン(ある種の状況では適切な行為の動機付けを持つことに徳の内実を見る立場)と、認知主義を重視するバージョン(状況の適切な認知が道徳的行為に直結すると考える立場)が考えられる。また後者のような認知主義が可能であるためには、道徳判断の真偽帰属可能性の基礎となる種々の道徳的事実を想定する必要がある。本研究ではこのような徳倫理学と道徳認識論・道徳心理学・道徳存在論との関連について総合的な観点から検討することを最終的な目標とした。その手段としてカント的な義務倫理学を経由して徳倫理学をメタ倫理学的な観点から検討することを目標にした。カント的な義務倫理学と動機内在主義との関連は比較的明らかなので、まずカント的義務倫理学と動機内在主義との関連を検討したのである。そして義務倫理学と徳倫理学との関連を動機内在主義との関連から明らかにすることを試みた。

動機内在主義は道徳判断と行為との関連についての主張だが、動機内在主義は本来情動主義、つまり表出主義に付随する非-認知主義的な主張として提起されたものである。しかし現代の動機内在主義はそのような旧来の非-認知主義的な内在主義とは異なり、道徳判断の真理性を前提した認知主義的・合理主義的なものである。

また新たな徳として考えられるのは、B.Williams が“*Truth and Truthfulness*”2002 で提起した「誠実さ」truthfulness という徳であり、当初本研究で主に研究の対象として想定していたのは、このような「誠実さ」truthfulness という徳である。

本研究でめざしたことは、行為の動機付けに関する議論（特に合理主義的内在主義）を手掛かりとして、現代メタ倫理学の潮流を規範倫理学と結びつけることである。内在主義と規範倫理学(義務倫理学や徳倫理学)とを接続することは、道徳心理学の性格を考えると一見容易なように思われる。しかし、情動主義的内在主義は必ずしも徳倫理学に至るわけではなく、すべての内在主義が徳倫理学に至るわけではない。本研究ではカント的-合理主義的な動機内在主義について分析し、合理主義的義務倫理学は必然的に徳倫理学を前提することを確認することを通じて、動機内在主義と徳倫理学との関連を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は単なるメタ倫理学のサーベイではなく、メタ倫理学の諸学説の中にある規範倫理学的な方向性を探ること、さらにメタ倫理学の動向を規範倫理学、特にカント的義務論と徳倫理学との接点の分析を通じて探ることを目的とした。また本研究はメタ倫理学的な研究を、倫理学史研究との関連を踏まえた上で行った。具体的には道徳心理学や表出主義を始めとしたメタ倫理学の現状のサーベイと論点整理、さらにメタ倫理学とカント倫理学との接点に関するサーベイである。

また本研究の代表者の蔵田の研究分野の一つはカント倫理学である。本研究では行為の動機付けに関する内在主義をカントに即して分析し、合理主義的な動機内在主義の可能性を検討した。そしてこのような合理主義的動機内在主義が必然的に徳倫理学に至ることを示すことを目標にした。

(1)研究会の開催とネットワークの構築

メタ倫理学研究については、少なからぬ中堅・若手研究者が、独自に研究を進めているため、情報の共有が十分になされていない。本研究の目的の一つは、二名の連携研究者を始めとした中堅・若手研究者の情報交換を行い、若手・中堅のネットワークをつくることであった。

本研究では 23 年度と 24 年度に関連する研究を行っている中堅・若手の研究者による研究会を開催し、関連する文献の紹介、論点の整理、意見交換を行った。それによって規範倫理学（カント倫理学及び功利主義）とメタ倫理学との関連を明らかにし、さらに道徳心理学、道徳存在論、非認知主義（特に表出主義）に関する見取り図を描くことを試みた。

23 年度は連携研究者であるベンサム研究者の児玉聡氏、ヒューム研究者の奥田太郎氏を中心に、道徳的価値の実在論について研究している若手中堅研究者と研究会を開催し、メタ倫理学に関する基本動向とその哲学史的背景に関する整理を行った。特に功利主義

に対してカント倫理学が与えた影響を明らかにした。さらに現代行為論、及び道徳実在論に関する議論の整理を行い、行為者の合理性と欲求及び行為の評価との関連、さらにロバストな道徳実在論の問題点について検討した。また哲学者ウイギンズの方法論を手がかりとして、メタ倫理学の方法論に関する検討を行った。

また 24 年度は動機内在主義と表出主義に関する研究を進めている若手研究者を中心とした研究会を開催した。外在主義、表出主義の展開、Is-Ought Gap、フレーゲ＝ギーチ問題について議論し、近年の表出主義は認知主義を前提する方向に向かいつつあることを明らかにした。

(2)トマス・ネーゲルの『利他主義の可能性』の翻訳

本研究では、トマス・ネーゲルの倫理学を中心としたメタ倫理学の見取り図を描くことを試みた。申請者はトマス・ネーゲルの *The Possibility of Altruism*(『利他主義の可能性』)の翻訳を若手研究者三名とともに進めた (勁草書房から出版予定)。この著作は、行為の動機付けに関する内在主義の立場から利他主義の可能性を論じたものとして、現代英米の規範倫理学・メタ倫理学・現代カント主義の基本文献の一つとされている。本書は関連する問題(合理性、自我や言語)について、的確に整理している。具体的には、行為の動機付けと合理性、将来の自己の利益の考慮(prudence)、 未来の自己との同一性、Prudence と利他性、エゴイズム、さらに「行為の動機付けを与えるものは個別的な判断か、非人称的な原則なのか」といった問題を扱っている。ネーゲルの内在主義に関する議論は道徳的言明の真理と行為の動機付けとの関連を論じるもので、道徳認識論に関わる議論を含んでおり、この著作の内容を整理することによって、本書出版後のメタ倫理学の見取り図のたたき台が得られた。

(3)海外の研究者とのセミナー開催

24 年度の 10 月には徳倫理学の代表的な研究者であるアメリカ・マイアミ大学の Michael Slote 氏を招聘し、‘The Use of Moral Judgement’と題するセミナーを開催して道徳的感情主義と道徳判断との関連について討議する場を持った。それによって道徳感情主義と徳倫理学及び道徳的行為の動機付けとの関連について見通しが得られた。また同氏は Against Moral Self-Cultivation というタイトルで講演を行い、それをもとにして道徳的自己陶冶に関する批判的な検討を行った。

また 24 年度はメタ倫理学を代表する研究者である、準実在論的表出主義のサイモン・ブラックバーン(Simon Blackburn,イギリス Cambridge University)と、道徳心理学の代表的な研究者であるシノット＝アームストロング(Walter Sinnott-Armstrong,アメリカ Duke University)を招聘し、セミナーと講演を依頼した。本研究費により招聘したシノット＝アームストロングによるセミナーでは、「道徳性」という独立した領域はあるのかということが議論された。さらに準実在論の立場をとりつつ表出主義の立場をとるサイモン・ブラックバーンとは表出主義と合理性との関連について議論し、非還元主義的な道徳実在論の可能性について検討した(Blackburn 氏は当初は本研究費で招聘する予定であったが、別の予算で招聘することになった)。

(4)学会・研究会での発表

また 24 年度は、4 月に応用哲学会第四回年次研究大会(千葉大学)でトマス・ネーゲルと動機内在主義との関連に関する発表を行った。これはネーゲルの内在主義の構造を The Possibility of Altruism に即して明らかにしたものである。

さらに 24 年度から 25 年度にかけ、現代のカント研究に動機内在主義が与えた影響についてサーベイし、関連する論文を執筆した。動機内在主義の代表は哲学史的に言えばカントであるとされることが多いが、カント倫理学は尊敬概念という感情による動機付けを考えているので外在主義だとする解釈もある。近年のメタ倫理学を踏まえたカント倫理学研究についてサーベイした上で、そのような解釈を批判し、その成果を「カント研究会」及び「北日本哲学会」で発表した。

(5)海外の研究会への参加

また 25 年度はメタ倫理学に関する研究動向の調査のために、ロンドン大学で開催された、メタ倫理学に関する研究会である British Society for Ethical Theory に参加し、ハイブリッド表出主義に関する最先端の研究に関する討議に参加した。

(6)　国内の研究者へのインタビュー

24 年度には R.M.ヘアの立場を踏まえて、内在主義に言語哲学の観点から着目する日本人研究者にインタビューを行った。また 25 年度には現代の代表的な徳倫理学者であるマクダウェルに詳しい日本人研究者にインタビューを行った。マクダウェルは認知主義と結びついた徳倫理学の立場であるが、インタビューではその個別主義的な性格について明らかになった。また他にウォレス等現代カント主義に詳しく、道具的実践理性の問題を扱う研究者へのインタビューも行った。

４．研究成果

本研究を通じて、徳倫理学と動機内在主義とは合理主義的内在主義を介在させることでその過程を示すことができるという見通しを得た。

トマス・ネーゲルと近年の表出主義に関する検討を経て、本来は情動主義的・非-認知主義的な主張であった表出主義は、道徳判断に真偽帰属が可能であるとする合理主義的な認知主義的方向に向かいつつあることを確認した。動機内在主義は、本来情動主義、あるいは表出主義に付随する非-認知主義的な主張として提起されたが、現代の動機内在主義はそのような旧来の内在主義とは異なり、道徳判断の真理性を前提した合理主義的-客観主義的なものである(カント的内在主義)。

さらに研究の過程で内在主義-外在主義の論争は、道徳判断に関する定義と理解の相違に基づくという確証を得た。つまり動機内在主義の立場では、〈道徳判断〉を行為の動機付けを与える立場だと理解しているが、外在主義は道徳判断をそのようなものとして理解しないのである。この点については、Sinnotte-Armstrong,Simon Blackburn の両氏からも同意を得た。なおこのような道徳判断に関する理解の相違は、判断を心的作用として理解するのか、それとも単なる命題として理解するのかの相違に基づくのではないかと思われる。また道徳判断を表出主義的に理解するかどうかという問題は判断一般をどのように理解するか（グローバルな表出主義）という問題と重なっていることが明らかになった。

さらに「格率」と「道徳法に対する尊敬」概念を中心とするカント倫理学の構造は、動機内在主義的ではあるが、道徳判断をキーワードとする厳密な意味での動機内在主義とは異なることが近年のカント研究のサーベイを通じて明らかになった。カント倫理学が動機内在主義であることは自明のように言われるが、カント倫理学を外在主義として解釈する立場もある。またカント倫理学には「道徳判断」という概念がないため、厳密には内在主義ではない。だがカントの格率概念を道徳判断と同義のものと読み替えることによって、カント倫理学を動機内在主義として理解することが可能になる。「格率」概念を手がかりとして、カント倫理学は動機内在主義であることを確認し、それによって合理主義的な内在主義の可能性を示すことができた。そのような研究の成果をまとめた論文はほぼ完成しており、27 年度に刊行される単行本の一部として発表する予定である。

なお動機内在主義とカント倫理学との関連についてはある程度の分析を行うことができたが、動機内在主義及び義務倫理学と徳倫理学の検討は不十分なまま終わってしまった。

なお本研究の期間中に、2 回の哲学カフェを開催し、研究成果の一部を一般の方の前で講じることができた(24 年 1 月及び 24 年 8 月。会場はいずれも(札幌市西区琴似)の「ソクラテスのカフェ」)。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 3 件）

①<u>蔵田伸雄</u>「カント倫理学と動機内在主義－現代メタ倫理学から見たカント倫理学」
カント研究会　第 274 回例会
山形大学　2013 年 9 月 29 日

②<u>蔵田伸雄</u>「トマス・ネーゲルの『利他主義の可能性』と動機内在主義」
応用哲学会　第 4 回年次研究大会
千葉大学　2012 年 4 月 22 日

③<u>蔵田伸雄</u>「科学技術のリスク分析をいかにして行うべきか －欠如モデル批判を超え研究者番号：て」
応用哲学会　2011 年度臨時研究大会
京都大学　2011 年 9 月 25 日

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
藏田　伸雄（KURATA Nobuo）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50303714

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
奥田 太郎（OKUDA Taro）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：　20367725

児玉 聡（KODAMA Satoshi）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80372366